

『ウッドデッキのダイバーシティ担当』

秋山咲恵

こんにちは。ウッドデッキで監事を務めております秋山咲恵です。

私はアカデミアではなくビジネスの世界でキャリアを重ねてきた異邦人的存在ですが、ウッドデッキのダイバーシティ担当としての存在意義を感じています。

私自身、大学を卒業する年が日本における男女雇用機会均等法改正の施行にあたり、女性にも企業の総合職（幹部候補生）としての門戸が開かれた時期に社会人となり、ビジネスの世界でのダイバーシティ進化の歴史を歩んできました。今でも女性がマイノリティであることに代わりはありませんし、女性の活躍に多くの課題が残されていることも事実です。それでも10年単位で振り返ると社会は着実に進化していることは明白です。昭和の時代を振り返ると、今でいうパワハラやセクハラはむしろ常習の世界でしたし、オフィス、乗り物、駅、あらゆるところには灰皿があるのがあたりまえでした。長いこと生きてみると、常識といわれていることや自分が縛られていると感じている社会や組織のしくみも無常のものであり、時代の流れのなかでは旧態依然としたものに囚われて苦しむより、流れに逆らわず身を任せつつ時代が向かう方向に沿って自分も進むことの方が得るものが多い人生を送れるのだということに気がつきました。私は、総合職1期生として入社した会社の仕事は面白かったものの、まだまだ結婚と仕事の両立に同世代の女性たちが悩む中、自分の人生の選択肢として（若気の至りで！）技術者の夫と最先端の画像処理技術を使った検査ロボットのメーカーを起業し、艱難辛苦を乗り越えてその会社を成長させた後に社長を卒業したら、時代は企業のガバナンス改革真最中、経営者としての経験を評価されて大企業から社外取締役として招聘されるという予想もしなかった新しいキャリアが待っていました。人の言うことには逆らっても、自然の摂理と時代の流れには逆らってはいけないのだなと思う次第です。その私が最近の若い方々を見ていて感じることのひとつは、“世の中には何か正解というものが存在していて、自分はその正解に向かわなければならないのだ”と思わされているのではということです。人生にあらかじめ決まった正解などないのです。岐路に立ってその時の自分が真剣に選んだ道ならば、歩き出して正解だったのかと悩むのではなく、選んだ道を正解にするように最大限の努力をすることこそ価値があると思うのです。

ウッドデッキのダイバーシティ担当として、みなさんお一人おひとりと対話してお互いに新鮮な発見を得る機会を楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

以上



何歳までフルマラソンを完走できるか挑戦中です。2026年も東京マラソンで記録更新しました！